

東総の主要集落・郡家と郡郷(上)

糸川道行

はじめに

源順が編さんした平安時代中期の事典である『和名類聚抄』(以下『和名抄』とする)には、日本国内各国の郡名・郷名が記載されている。本稿で対象とする地域はそのなかの下総国匝瑳郡・海上郡・香取郡の地域である。これらの地域を本稿では一括して東総と呼ぶ¹⁾。

筆者は別稿で東総に存在する奈良・平安時代の遺跡がどの郷に属するかを想定した(糸川2020)。本稿はその基礎的な考察をもとに、各郷における主要集落・郡家の様相・各郡郷間の関係等について述べる。

本稿は筆者にとって下総国における奈良・平安時代の集落研究の一環であるが、その目的は奈良・平安時代の東総が豊富な歴史遺産をもつことを述べる点にある。

なお本論は紙幅の都合上、上下の2稿に分割した。

1 東総の郡郷各論

別稿(糸川2020、以下前稿とする)で筆者は東総の奈良・平安時代の遺跡がどこの郷に属するかを検討したが、記述のみであるため郷の範囲はわかりにくいものであった。そのため本稿では第1図から第4図までの図面に郷名と遺跡名を記入し、視覚的にわかりやすくした。ただしドットと遺跡名を記入したものは主として2019年2～3月にとりくんだものであり、その後のものは一部しか記入していない。なお遺跡が混み入っている場合、一部の遺跡について記入を省略した。したがってこの分布図には不備があるが、郷の範囲をみるうえで大略はとらえていると理解している。なお本稿でとりあげた遺跡の報告書等は数が多いため執筆者の考察を参考とした場合には引用・参考文献として記載したが、そうでない場合は省略した。

各郷の郷域については郷名の遺称地と周囲の地形および遺跡分布によっておおよそのイメージがあり、また河川などによって明瞭に区切られる場合があるが、現代の行政界のように必ず境界があるというわけではない。特にどこの郷にも属さない、たとえば養老雑令九条(国内条)にみえるいわゆる公私共利の性格をもつ

ような土地と隣接している場合には明瞭な境界は存在せず、そのような郷は閉じた境界線を引くことができない。また周囲を他郷に囲まれた閉じた郷であっても、他郷との間に明瞭な境界を認定することは難しい場合が多い。さらに郷域については今後発掘調査される遺跡のあり方によっても変動が予想される。香取郡山幡郷のように『和名抄』に記載される時点では廃止された郷や、開発の進展などに伴って郷域が変動(主として拡大か)する場合もある。郷間の境界線を考えるのはイメージの形成のうえではよいが、それを明示することは歴史事実と反する場合がある。したがって第1図から第4図までの図面には郷間の境界線を引いていない。ただし下総国と上総国の国境線だけは図中に示した。国境であっても下総国と上総国では同一台地上を区切る場合があり、後の時代においても不明瞭なところがあったようである。そのため図には破線で示した。

(1) 東総三郡各郷の郷域(第1～4図)

各郷の郷域の様相については第1図から第4図に譲り、以下一部の郷について補足的なことを記す。

① 匝瑳郡

田部郷は栗山川上流とその東西の支流周辺が郷域であり、広域な郷である。北方で香取郡大槻郷・香取郷、東方で海上郡布万郷と接するがその境は不明瞭である。中村郷と原郷の境は栗山川である。原郷と茨城郷との境は多古橋川である。

② 海上郡・香取郡

海上郡と香取郡は海上郡大倉郷と香取郡山幡郷などとのあいだで郡郷の再編があるため、あわせてみていく。

まず海上郡橘川郷であるが、石田郷との位置関係について、前稿では橘川郷を北西、石田郷を南東とした。しかし宮内勝巳氏は筆者とは逆に、石田郷を北側、橘川郷を南側としている(宮内1994)。橘川郷の遺称である東庄町今郡にある橘小および下総橘駅と石田郷の遺称である東庄町石出は、ほぼ西・東に並ぶ位置関係である。両者の近辺に所在する遺跡名をみると、石出古

墳群は橘小の近くにあるが、橘古墳群はそれらの南方に位置する。この点が石田郷を北、橘川郷を南とする根拠であろう。

この件について別方面から検討する。『和名抄』の並び順をみると、元和古活字那波道圓本では橘川郷が石井郷と横根郷の間に入っているが、高山寺本と名古屋市博物館所蔵本では最後になっている。後2者の並び順は、海上郷における情報やものの伝達ルートが大倉郷からほぼ反時計まわりに巡って、最後に橘川郷に至ることを示すとみる。山路直充氏は、『和名抄』における郷の記載が2郷で一組のセットになる場合が多いことを指摘している(山路2009)。この視点からみると、石田郷と石井郷はその前の2郷×4組のセットの後に続けて記載されており、隣接する位置関係である可能性が高い。石井郷の比定地は遺称地・墨書土器から特定されるが、周辺諸郷との位置関係からみて、石田郷は石井郷の北方に位置するとみる。また同じ「石」の名をもつことも両者の隣接関係を表す可能性がある。石井郷からは須賀郷・横根郷と2郷一組であるが、その後の三前郷・三宅郷・船木郷は3郷で一組になり、情報・ものはこの順で伝達される。最後に船木郷から橘川郷に至り、海上郡における伝達ルートは一巡する。以上のみかたが妥当であれば、橘川郷を北側、石田郷を南側とする方がその逆よりもスムーズな動線となる。このように『和名抄』からみると、石田郷の北方に橘川郷を置くことが妥当である。

麻統郷は黒部川流域の低地を多く含むが、南方の台地まで延びる。布万郷は遺称地から西方に延びて逆瑛郡田部郷・玉作郷と接する。田部郷との境は不明瞭である。神代郷と編玉郷は北方の香取の海側の低地まで含む。横根郷は海浜砂堤帯・台地上の双方を郷域とする。

香取郡の諸郷は概して広域であり、『和名抄』に伝えられていない郷が山幡郷や「真敷郷」以外にも存在するのではないかという疑念をもつが、墨書など新たな資史料の登場がなければ難しい。『和名抄』に伝えられた各郷は統廃合の変遷を経ているが、本稿では『和名抄』成立時点では欠落がないという前提で記述する。

香取郡と海上郡の郡郷域の変遷についてとりあげる。古屋敷遺跡や名号戸遺跡から出土した「山幡」の墨書土器は9世紀中頃の歴年代が想定されており、正倉院文書に残る養老五年(721)に記載された時点からは百年以上も後のものである。山幡郷が『和名抄』にはみえないことから、前稿でみたように原田亨二・平野功

の両氏は、山幡郷が『和名抄』成立時点では消滅していると考察した(平野1992・1994、原田1993)。山幡郷について原田氏は隣接する香取郡大槻郷・香取社領にとりこまれたとした。一方、平野氏は海上郡の郡郷を考察し、山幡郷が海上郡城上郷に近いことや、増田地区の北西方向に海上郡大倉郷が存在することから、古屋敷遺跡周辺は海上郡にとりこまれたとした。

もしも9世紀中頃時点まで香取郡山幡郷が存続していた場合、海上郡大倉郷のあり方も問題である。大倉郷が当初から海上郡であるとすると、9世紀中頃まで大倉郷は北方を除く周囲が香取郡であり、飛び地といえるあり方である。逆に古代の郡郷のあり方として飛び地は存在しないということであれば、大倉郷は当初香取郡であったことになる。大倉郷については、郷長層が海上郡と関りが深い、あるいは出自が海上郡であるなどの理由により海上郡に編入する必要が生じたとみる。その場合、大倉郷と城上郷の間にある山幡郷の多くも海上郡に編入する必要が生じたことになる。

以上、大倉郷と飛び地の問題について、飛び地の肯定・否定の両面から述べたが、日本全体の郡郷のあり方について詳細な知見をもたない筆者には真偽を断定することができず、問題提起に留める²⁾。

いずれにせよ、かつて香取郡山幡郷といわれた地域の多くは海上郡大倉郷・城上郷に編入された。それはすでに平野氏が考察したとおりである。ただし織幡地区は香取郡大槻郷に近いので、織幡地区の一部が山幡郷であった場合、大槻郷に編入されたとする原田氏の考察があり得る。

なお海上郡と香取郡の境界が奈良時代から平安時代にかけて変動があったことは、山路直充氏も言及している(山路2014)。また香取市(旧小見川町)一ノ分目に所在する境宮神社の「境」は海上郡と香取郡の郡界を表したものである。

吉原三王遺跡から出土した墨書「吉原大畠」は中世の史料により、現在の吉原地区からその西方の新市場地区まで含むものとみられている(栗田ほか1990・戸村1997)。そうすると、香取郡大槻郷は香取神宮のすぐ南方まで入り込むことになる。地形をみると、吉原地区と新市場地区の間には狭いが南北から谷が入っており、台地の幅が狭くなっている。大槻郷と香取郷の境については、地形的には吉原地区と新市場地区の間とする方が自然にみえるが、本稿では墨書土器・中世史料からうかがえる歴史的様相を優先する。香取神宮は大槻郷に所属する可能性もあるが、郡名と同じ香取



第4図 香取郡西部を主体とする地域の郷・遺跡

郷に所在する可能性をより強く考える。いずれにしても両郷と香取神宮との関わりは深い。

香取郷は小野川中・下流両岸を郷域とする。馬場遺跡では1棟の竪穴建物から体部外面に「鹿郷長鹿成里成里人□」、底部に「子山口」と墨書された土師器杯が出土した(栗田ほか1988)。「鹿郷」は香取郷のことであり、この墨書土器によって香取市福田周辺などの香取市内陸部まで香取郷が広がり、香取郷が南北に長い広い郷域であることが明らかになった。香取郷と南方の田部郷との境は不明瞭である。小川郷と健田郷との境は大須賀川である。健田郷と磯部郷との境は境川である。磯部郷は荒海駅周辺の駅戸集落群と遺称地周辺の間に尾羽根川がある。磯部郷と訳草郷との境は荒海川である。磯部郷の東側は訳草郷との境が不明瞭である。訳草郷は南方に埴生郡山方郷が位置する。その境は取香川である。訳草郷の東側は磯部郷・山方郷との境が不明瞭である。「真敷郷」は大須賀川上流およびその支流の流域を郷域とする。真敷駅は延暦二十四年(805)に廃止するが、その後の周辺地域の所属郷が不明瞭であり、公私共利の地が広がったとみた方がよいかもしい。

③ 東総および周辺各郡の郡界

ここで郡界について整理する。東方からみていく。海上郡小野郷・石井郷はその西方が椿海及びその低地である。椿海については公私共利の地とみるが、逆槎郡との関りが強いと考える。海上郡須賀郷と逆槎郡辛川郷の遺称地は近く、その間に海上郡と逆槎郡の境界が存在する。ただし両郷は海浜砂堤帯に存在するので、地形から区分することは台地上の郷以上に難しい。

椿海北方の逆槎郡日部郷はその北方が海上郡軽部郷である。軽部郷の西方は海上郡布万郷である。布万郷はその南東で日部郷、南で逆槎郡珠浦郷、西で逆槎郡玉作郷と接し、逆槎郡田部郷とも接する可能性がある。田部郷の北方は香取郡大槻郷・香取郷である。また田部郷東側の北方で海上郡城上郷・麻統郷と接する可能性がある。さらに真敷駅廃止前は、田部郷の西方に香取郡「真敷郷」(駅家郷)が存在した。

成田市十余三周辺に香取郡(訳草郷・健田郷・「真敷郷」・小川郷)・逆槎郡(茨城郷)・埴生郡(山方郷)・武射郡(加茂郷)の郡界が存在する。それは概して明瞭な線状のものではない。その南方では多古橋川と高谷川にはさまれた台地上に下総国と上総国の国境がある。多古橋川の支谷側の台地が逆槎郡茨城郷、高谷川の支谷側が武射郡加毛郷・狎猥郷である。茨城郷から南方

の下総国・上総国国境は栗山川である。栗山川左岸(東岸)が下総国逆槎郡石室郷・幡間郷、右岸(西岸)が上総国武射郡狎猥郷・長倉郷・片野郷・巨備郷である。なお片野郷は栗山川からやや離れるかもしれない。

目を西方に転じる。根本名川中・下流(長沼を含む)の右岸(東岸)側が香取郡磯部郷・訳草郷、左岸(西岸)側が埴生郡酢取郷・玉作郷である。

(2) 高津馬牧の比定地について

郡郷の比定からは離れるが、多古町高津原を『延喜式』にある高津馬牧の比定地とする説がある(多古町1985 a など)。多古町高津原は原郷に含まれる地域である。しかし高津馬牧については、八千代市高津をあてる説がこれまでのところ有力である。高津馬牧については考古学的には不明である。ただし八千代市高津の近辺をみると、習志野市谷津貝塚周辺が浮嶋牛牧の比定地であり(笹生・大口ほか2013)、また船橋市意富比(おおひ)神社(船橋大神宮)周辺が大結馬牧の比定地として有力である(吉井2001)。さらに各地に所在する栗原郷は平川南氏によって馬匹生産が盛んであったと考察されており、船橋市印内台遺跡などが所在する葛飾郡栗原郷もそのような郷の一つである(平川2014)。このような当時の歴史的な環境からみると、高津馬牧はやはり八千代市高津周辺に所在する可能性が高い。

しかし逆槎郡の内陸部には葛飾郡の栗原郷と同名の栗原郷が存在する。そのため高津原が位置する原郷を含めた逆槎郡内陸部の諸郷においても馬匹生産が盛んであった可能性がある。官牧ではなくても逆槎郡が関与した牧や各集落が主導する私牧が存在したとみる。

なお成田市(旧下総町)名木不光寺遺跡では多数の馬を埋葬した土坑が検出されており(萩原1993)、香取郡の集落においても馬の飼育が盛んであることが実証された。これについては次項でも述べる。

(3) 逆槎郡と山辺郡の比較

山辺郡内の郷を考察した萩原恭一氏は、海岸平野に所在する郷は禾生郷と武射郷の2郷のみであり、台地上の5郷と比べて数が少ないことを指摘した(萩原1988)。そしてその理由として、農業技術の問題や開発力の不足をあげている。

それに対して逆槎郡の場合、海岸平野には野田・長尾・辛川・幡間・須加・大田の各郷がある。また石室郷も台地とともに低地部分を含む。これらの各郷は海岸平野にまんべんなく分布しており、山辺郡のあり方と異なっている。

芝崎遺跡や中島遺跡のあり方をみると、農業技術の

問題は考えがたい。それではこの違いは何かというと、まず第1に海岸砂堤帯に存在する道路の通行量の差があるとみる。迺瑛郡では頻繁な通行があったが、迺瑛郡に比べれば山辺郡は少なかったのである。第2に郡内の開発の指向性の違いである。迺瑛郡では台地上も海岸平野も開発は活発であったが、山辺郡は台地に偏重して開発された。迺瑛郡の場合、香取郡との分水界地帯は集落分布が薄くなり、田部郷などの郷域は広域である。いっぽう、山辺郡の場合は郡内の開発傾向において上総国府や千葉郡山家郷との関係があるとみる。

郡内の開発の指向性について、他地域の例として印旛郡船穂郷に触れる。船穂郷では西側の集落分布が中央や東側に比べて薄い(糸川2019)。筆者はこの点について農業技術上の問題はなく、開発が東側から西側に及んだ影響とみている。このような開発指向性の違いや交通状況の差が山辺郡や迺瑛郡の集落分布に反映している。

2 東総三郡の郡家の比定

下総国において郡家の位置や建物群の一部が判明しているのは相馬郡と埴生郡の二郡のみであり、東総三郡はその位置が特定されていない。しかし各郷と集落を考えるには郡家について考えなければならない。手がかりは少ないものの、本項で若干触れる。

まず迺瑛郡家であるが、匠瑛市生尾遺跡を比定地とする。生尾遺跡の調査では、狭い調査区ながら飛鳥時代から平安時代の竪穴建物・掘立柱建物が多く見つかかり、特に掘立柱建物の多さが目を引く。郡庁や正倉は検出されていないが、掘立柱建物群は郡家関連の建物群とみられる。また調査地の南西、同一台地上には式内社である老尾神社が存在する。この生尾遺跡・老尾神社の所在する台地に郡家及び迺瑛郷の郷家集落が存在するとみる。なお迺瑛郡家を老尾神社付近とすることについては、すでに幾人かの研究者が指摘している(西山1982、實川1995、田形1997)。

生尾遺跡以外の比定地候補としては、八日市場大寺があり、古郡の小字名をもつ匠瑛市大寺周辺が有力である。ここは千俣郷の比定地である。しかし生尾周辺は郡名と郷名の双方を兼ねる地であること、また奈良・平安時代は迺瑛郷東南方の海浜砂堤帯の重要性が高まったため、台地と低地の双方を掌握する場所として、すぐ東方が椿海となる千俣郷よりも迺瑛郷の方が郡家比定地にふさわしい。あるいは先に千俣郷に評家があり、後に郡家が迺瑛郷に建設された可能性もある。

ほかには、以前、多古町信濃台遺跡をあてる考えがあった(黒沢1995)。信濃台遺跡は内陸の拠点として重要な遺跡であるが、中村郷の郷家集落の候補遺跡であり、郡家本体の比定はできない。また『多古町史』では、「中村」という地名を中心地とみて、郡家が中村郷に存在するとしている(多古町1985b)が、地名だけでは弱い。中村郷の郷名は周囲を他郷に囲まれていることに由来する。

海上郡家も郡庁や正倉群は検出されていないが、筆者は平野功氏が想定した香取市(旧小見川町)清水堆遺跡を支持する(平野1994)。平野氏は1986年の清水堆遺跡の発掘調査において検出された溝が、幅2.5m、深さ約2mの規模をもつ断面「V」字状のもので、南北に長く走行することと、埋土下層から布目瓦が出土したことを紹介した。この溝は郡家の区画溝とみられる。この調査の報告書が刊行されていないことが惜しまれるが、その後、清水堆Ⅱ遺跡の調査において両側に側溝をもつ幅5.5m(側溝を除く)の道路が見つかり、奈良・平安時代の道路と想定されている(今泉1999)。この道路は郡家に関わる道路である。清水堆遺跡の調査はそれ以外では奈良・平安時代の竪穴建物が数棟見つかった程度であるが、上記の理由により、海上郡家の位置は特定されたとみる。また清水堆遺跡が所在する海上郡西側に官衙関連遺物が集中すること(小林2006)、初期寺院である木内廃寺および木内廃寺に瓦を供給した清水入瓦窯が近くに存在すること、広大な台地に立地することなども、清水堆遺跡周辺が海上郡家であることを示す。なお山路直充氏は清水堆遺跡の西方に位置する内野遺跡を比定地としている(山路1998)。内野遺跡では平瓦が採集されている(高木ほか1978)が、そのほかの様相は不明である。内野遺跡は、千葉県埋蔵文化財包蔵地を示すインターネット上のふさの国文化財ナビゲーションでは石仏遺跡とされている。この石仏遺跡は清水堆遺跡西隣の遺跡であり、清水堆遺跡とは一体の遺跡である。したがって山路氏の比定も平野氏の比定と同様のものである。以上から、海上郡家は城上郷(城内郷)に所在するとみる。

海上郡家の位置については東庄町今郡周辺に存在すると推定する説もある(赤塚1995)。今郡周辺は今郡カチ内遺跡などで検出された鍛冶遺構の存在や、武射・迺瑛・常陸間などの交通路を考えるうえで、重要なところである。また今郡の「郡」が何らかの歴史的事実を伝えているのであれば、郡家別院が存在する可能性もあるが、現状の考古学的所見では断定しがたい。

香取郡家の位置は不明瞭である。官衙関連遺物などは郡域の東側と西側に分かれて分布しており、どちらかに官衙が存在することが推定されている(小林2006)。郡域西側の神崎町には郡の地名がみられ、そこに所在する遠台遺跡が郡家の候補地の一つとされている(原田・黒沢ほか1986、池田2012など)。遠台遺跡は広大な台地上に立地するが、遺跡の様相は不明である。地名からみると、東側の香取市にも上小堀・下小堀の地名があり、「コオリ」の音に近い。ただし、上小堀地区は香取郡山幡郷から海上郡大倉郷に編入された地域とみられ、また下小堀地区も海上郡城上郷(城内郷)の郷域内とみるので、上小堀・下小堀の「コオリ」はむしろ海上郡家との関係性の方が強い。しかし香取郡家が香取郡東側に存在した場合、海上郡家との距離が近く、小堀の「コオリ」は両郡家に関わる可能性もある。以上から香取郡家の所在地は地名からみても神崎町郡周辺が絶対的優位であるとはいえない。

これについて別の方面からもみる。『続日本紀』神亀元年(724)二月壬子条に、香取連五百島が陸奥国の鎮所に私穀を運んだ功績により、ほかの東国豪族とともに外従五位下に昇叙された記事がある。川尻秋生氏は香取連五百島が下総国香取郡司であると考察している(川尻2003)が、首肯できるものである。この香取連五百島は養子に香取神宮の大宮司となる大中臣清暢を迎えていることから、香取神宮とも関りの深い人物である。神郡である香取郡では香取神宮の存在は大きい。

以上、考古学的には確かな根拠はないものの、郡家は香取神宮が位置する香取郡東側に存在するとみる。香取郡の西側に官衙関連遺物を出土する遺跡があるのは、荒海駅や駅路が存在する影響である。なお地名の「郡」が古代の様相を伝えていけば、神崎町郡周辺に郡家別院の存在を想定できる。上記の遠台遺跡はその有力な候補地である。(つづく)

注

- 1) 本稿で対象とする地域を現在の行政区画からみると、成田市の東部以東、銚子市まで、南側は多古町、横芝光町の旧光町域である。なお、旧下総国・上総国の国境は不明瞭なところがあり、地形を含めた詳細な地域の様相については、別稿(糸川2020)を参照していただきたい。
- 2) 飛び地の問題については甲斐国の郡郷を論述した原正人氏が言及している(原2020)。原氏は巨麻郡等力郷・栗原郷が山梨郡に飛び地として存在したという説については後世の影響であるとして否定し、等力郷・栗原郷は本来巨麻郡に存在したと考察した。

引用・参考文献

- 赤塚弘美 1995 『岩井安町遺跡』(財)東総文化財センター
池田大助 2012 『神崎町羽黒遺跡』(財)千葉県教育振興財団
糸川道行 2019 「鳴神山遺跡出土「馬牛…」墨書土器と船穂郷」『研究連絡誌』第81号(公財)千葉県教育振興財団
糸川道行 2020 「奈良・平安時代における東総の集落と郡郷」『研究連絡誌』第83号(公財)千葉県教育振興財団
今泉 潔 1999 「清水堆Ⅱ遺跡」『事業報告Ⅰ—平成10年度—』(財)香取郡市文化財センター
川尻秋生 2003 「大生部直と印波国造—古代東国史研究の一試論—」『古代東国史の基礎的研究』塙書房
栗田則久ほか 1988 『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』(財)千葉県文化財センター
栗田則久ほか 1990 『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書—流山市思井堀ノ内遺跡—』(財)千葉県教育振興財団
黒沢哲郎 1995 「信濃台遺跡」『事業報告Ⅳ—平成5年度—』(財)香取郡市文化財センター
小林信一 2006 「官衙関連遺物出土遺跡の複合分布状況の有する意義」『研究紀要25』(財)千葉県文化財センター
笹生衛・大口和樹ほか 2013 『谷津貝塚埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』テイケイトレード株式会社
實川 修 1995 『生尾遺跡』(財)東総文化財センター
高木博彦ほか 1978 『企画展 房総の古瓦』千葉県立房総風土記の丘
田形孝一 1997 「黒潮満ちる道—八日市場市平木遺跡の再検討—」『平成9年度企画展 図録「古代の道と旅」』千葉県立房総風土記の丘
多古町 1985 a 「高津馬牧について」(通史編第二章第四節一中)『多古町史(上巻)』多古町
多古町 1985 b 「匝瑳郡家と屯倉」(通史編第二章第二節一)『多古町史(上巻)』多古町
戸村勝司朗 1997 『多田遺跡群』(財)香取郡市文化財センター
西山太郎 1982 「第5章 奈良・平安時代の八日市場」『八日市場市史 上巻』
萩原恭一 1988 「郷名比定について」『東金市久我台遺跡』(財)千葉県文化財センター
萩原恭一 1993 「下総町不光寺遺跡」(財)千葉県文化財センター
原田亨二 1993 「「下総国釘托郡少幡郷」についての覚え書き—古屋敷遺跡出土墨書「山幡」をめぐる—」『調査研究報告』第5号 千葉県立大根博物館
原田亨二・黒沢哲郎ほか 1986 『4 佐原市内遺跡群発掘調査概報』佐原市教育委員会
原 正人 2020 「古代甲斐国郡郷の再検討—山梨郡を中心として—」『山梨県考古学協会誌』第27号
平川 南 2014 「古代社会と馬—東国国府と栗原郷、「馬道集団」—」『律令国郡里制の実像』下巻 吉川弘文館 初出は鈴木靖民編2012 『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館
平野 功 1992 「地名考(1)」『香取通信』第302号 香取歴史教育者協議会
平野 功 1994 「古代の地名を考える—小見川町古屋敷遺跡出土の墨書土器を中心として—」『香取民衆史』7 香取歴史教育者協議会
宮内勝巳 1994 『新農遺跡』(財)東総文化財センター
山路直充 1998 「八日市場大寺廃寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県
山路直充 2009 「寺の成立とその背景」『房総と古代王権—東国と文字の世界—』高志書院
山路直充 2014 「下総国の郡・郷・里・駅家」『市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 遺跡編』市川市文化国際部文化振興課
吉井 哲 2001 「古代房総の牧と馬」『千葉県の歴史』通史編 古代2 千葉県